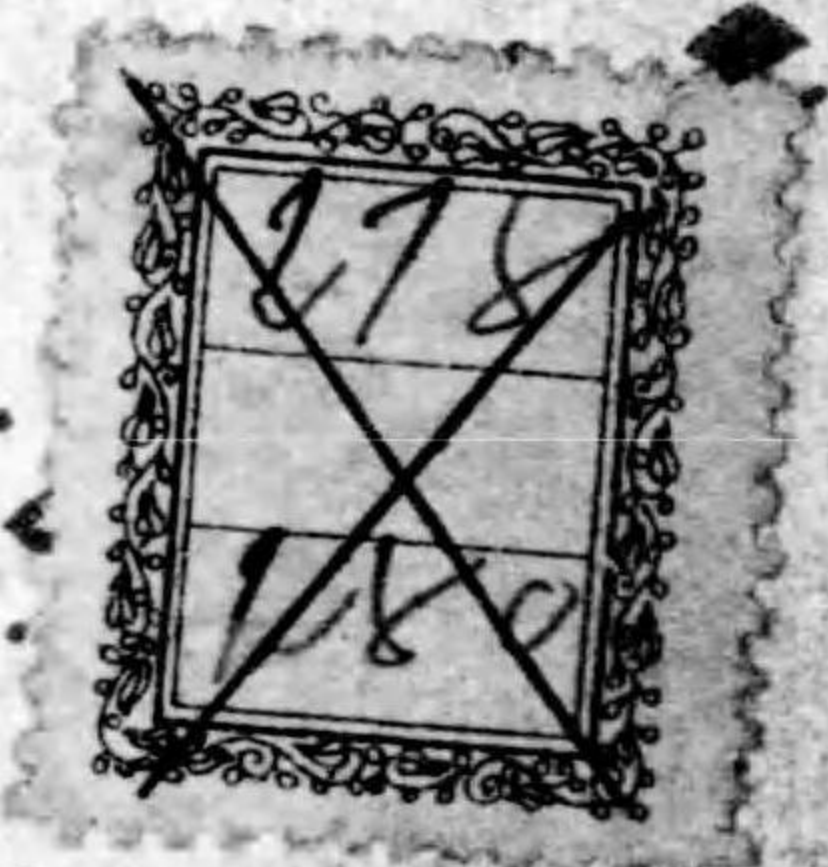




片

白

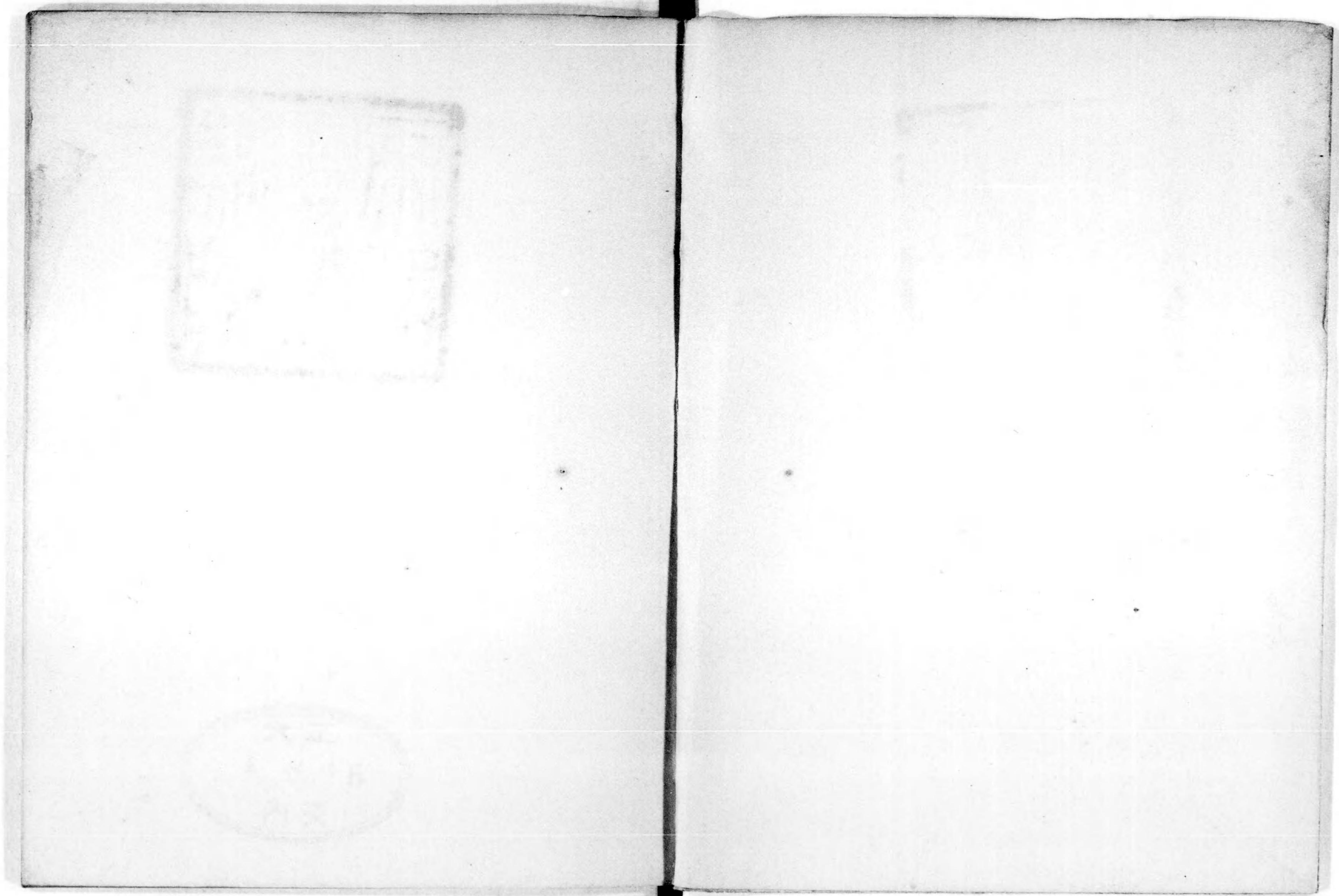


特



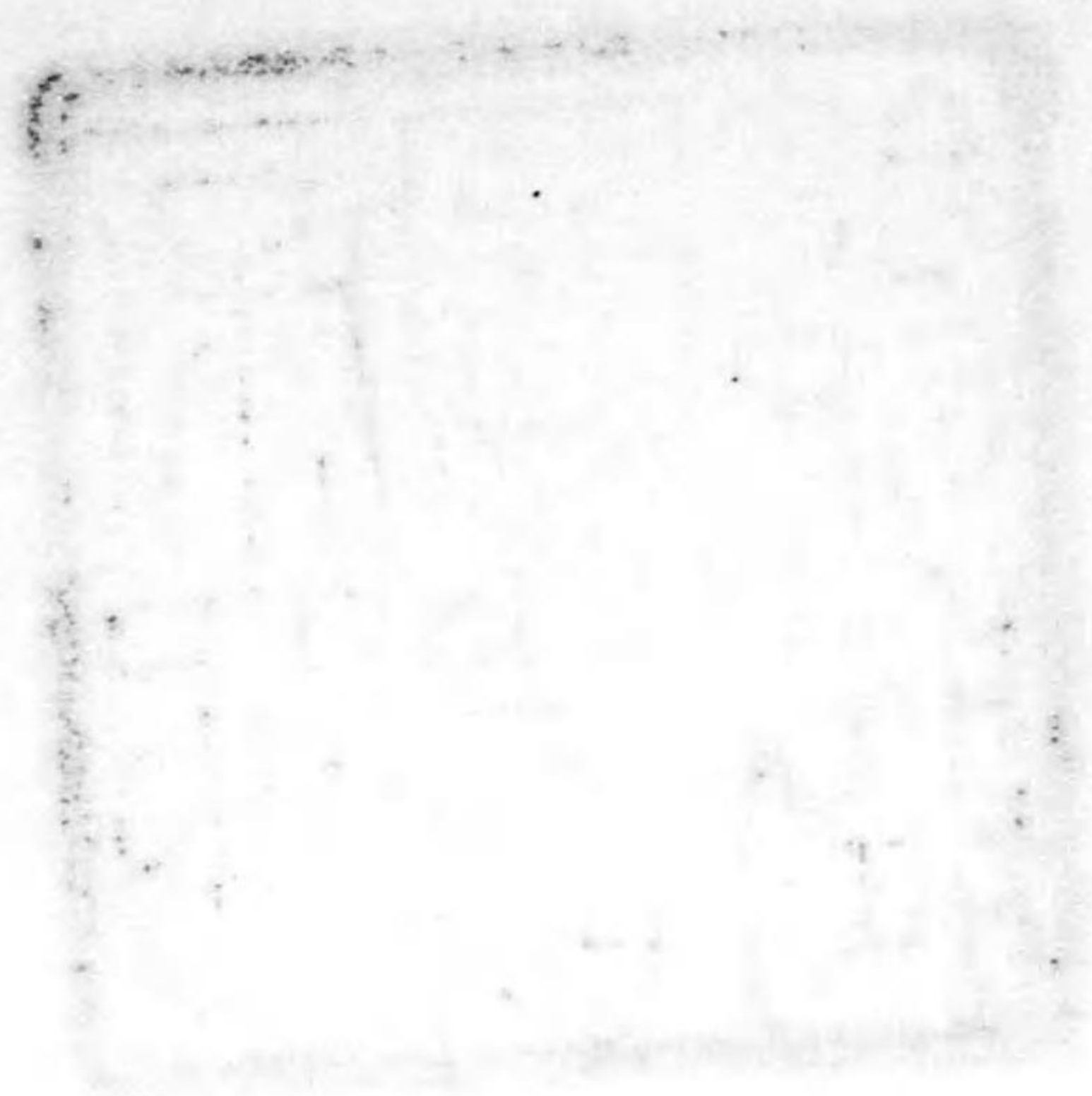
始







山
田
邦
子



特101
383

自序

(光りは暗きに照り暗きは之を曉らざりき)
思ひ出したやうなじぶんに、ふと、姿見
日記に集めた以後の歌を集めて見る氣に
なりました。

今の自分とは考がへかたが餘程異つてゐ
る處がありますので、何んとなく心がす



ます「きこらない」思ひがして幾度か止めやうと思ひましたが、然し又確かに自分の通つて来た道を見せられるので、矢張り此まゝばらくに終らせてしまふのも何んだか心がすまなくとうとう思ひ切つて集めてみる事にしました。それは例へば家庭を持つてから、まだ獨身であつた頃の

經濟書を見るやうに、神を疑つてゐた頃の此時代のものを今見ると、どんなに苦しんでゐても、又どんなに考へこんでゐてもそれはどこかまだ不足な點があり底まで貫いてゐない、ぬけた處のある事を思はせられます。さうして家庭を持つてから獨身時代の經濟書を人に見られるや

うな恥しさが今私にあります。けれども
それもこれも自分の生の一階段であつた
には相違ないので、やはり自分
は切つても切れぬ深い愛着があるのです
それでかうして更に集めて見る決心を強
くしました。と申て今の自分をもう充分
透徹した自分だとは思つてゐないのは勿

論です。此歌、即ち一昨年の暮までの
自分の内生活と比して今の自分が、唯自
分として、より眞實になつて來た事だけ
を思ふのです。もう之等の歌をよんだ頃
の心持が今の自分の生の深さではないと
いふ事であるのです。今私は神の愛と能ちから
を全く信じて居るのですから私の生の深

みはそこに行つて居るのですから。思へば此歌をよんで居た頃の自分から今の自分になつて來た生の道を思へばそこにも非常な神の意味深遠な創造の力を感じさせられます。

あゝ神の智と織の富は深いかな、其審

判は測り難く其踪跡はたづね難し。

と昔の聖使徒の言つた此言葉に生があり其生のなかに私もあります。

集の後のちにのせた岩波花子は私の姉であります此姉と私とは幼い時から仲よしでありました。姉も昔は歌や詩を作つたりして私とよくお互に評し合ひました。今姉は普通の家のお嫁様です。もう昔のやう

に夢中になつて歌や詩を作つてはゐられぬ身の上です。此間久しぶりで作つたと云つて送つてよこした歌の一部を、ふと昔の事を思ひ出してなつかしくなりましたので集めて一緒にして見ました姉は非常な理性家でした。

大正四年四月二十日

著者しるす

片々目次

夏に入らんとして……………	一
洲羽の歌……………	一五
或る日或る時……………	三〇
暗きに伏して歌へる……………	八〇
痛痕の秋……………	一〇六
岩波花子の歌……………	一五二

五月雨の夕悲しも鳴る笛ふえのまして悲し
も吾子が吹きしく

ほろほろと吾わが子が吹きしく笛の音のわ
が淋しさに鳴りひびくなる

ほろほろと吾子が笛吹く此母を淋しが
らせに笛を吹きしく

五月雨降る此淋しさに握りたる手は木
の如し吸へど木の如し

梅雨ばれの太陽はむしくとにじみ入
る妻にも母にも飽きはてし身に

おしろいの白けし匂ひ興ざめの顔色に
泌む雨の冷たさ

吾が蒔きし夏草の花咲きにけりおかし
や赤く花咲きにけり

捨つる如くわが蒔きし此夏草に赤き花
咲き赤き花咲く

お臺場も縁になりて三月見ぬ海に夏舟
浮ける悲しさ

戀人とよしや添ふとも添はずともとて
もかくても淋しき吾かな

ほのほとも火ともなるべき生うまれながら
一人守りて朽ちてゆく身は

狂ひはて海もみそらも一いも様やうに目にうつ
る日のあらむ我性まがさが

きぬ糸の赤き一すぢかみふくみ物思ふ
こそわりなかりけれ

うす青く初夏の風つとばかり狂はんと
する瞳に光りゆく

大空の此もとにしてうち狂ひうち狂ふ
日のあるか淋しや

血の音を聞けば淋しや夫[？]よ子よ吾等に
何^能のか、はりあらむや

吾子よ汝^なもやがて淋しく母を見て孤^{ひと}り
血汐の音を聞くらむ

淋しき日淋しき日とぞ今日もかも思ひ
わびぬれあはれいつまで

とざゝれて滅ほろびゆく日を待つ如き淋し
き家となしはてにけり

にごりはて朽くさりし如き此頃このときの我家悲
しき夏帽子かぼうしかな

暗き家淋しき母を持てる兒がかぶりし
青き夏帽子かぼうしはも

夏ばうしかぶりてゆきし吾子の顔しみ
く見えて暗き家かな

青葉若葉きらめき光る六月の丘にゆく
道見れば悲しも

ちり多き此六月の夕ぐれのものゝ明り
の迫る悲しさ

兒をつれて歩む女に氣まぐれの六月の
夜が語るたはこと

此暗く淋しき家の軒にたつ蚊ばしらこ
そは悲しかりけれ

兒が泣けば母も泣きたき此家の淋しき
軒をめぐれる蚊柱

兒の肉はらにつと齒あつれば全身の愛ぞめ
さむれけものゝ如く

洲羽の歌

わが信濃まして彼の諏訪とりよるふま
青き山の夏にゆかばや

ぼつねんと此諏訪のくにの屋根石とも
だしはつべき我身なりしを

天龍の古き河ばたわが行けどしづ心な
の水車かも

天龍の水のをどりを一をどりをぞれめ
ぐれる淋しき水車

天龍の古き河ばたわが行けど彼の若者
らに又逢はぬかも

わが弟一とせ逢はぬ心より人なつかし
き銀笛吹くも

山と人と小暗く暮れて湖の水光りたる
諏訪の淋しさ

うす青き此湖の水邊ゆき水邊ゆきわが
いのち淋しむ

あの山の山の麓にわが姉の泣いて嫁ぎ
し泣いて暮します

あの山越えて落つる夕日は其かみのか
とやかしさに沈みゆくはや

山々に陽のさしくれば洲羽の湖の水青
光り身のまさびしき

うす青き諏訪の平の夏霽にむせびて思
ひそめし君はも

三人兒の母となりたるわが姉の逢ひに
こしかも骨さへやつれて

山の國諏訪にし來れば夏さむみはやこ
ほろぎの鳴いてあるなり

其かみの彼の野少女が妻となり母となり
歸り來しぞ故郷

たま／＼の一人寝もよや山の國の朝の
鏡に素顔うつし給へ

(二首、諏訪ホテルに一人宿りし彼の日の貞奴氏に)

まれに來て此山國に一人寝し役者の肌
に迫る山の氣

何となくなじめぬ心苦しきのふと現は
れて淋しき焚火

爐のはたの暗きにうづみ火を焚けご信
濃をとめとはやなれぬかも

いろりばた母どもの言ふ言の葉も心も
母にひびかぬ淋しさ

山鳥の鳴くも淋しく信濃路を見とつれ
てまた歸りゆくはや

呼子鳥胸にひびいてまさびしくわが七
つより君戀ひし國

嫁ぎせし家の娘の淋しさを身におぼえ
つゝ焚火せりける

いろりばたふとの起ち居も此家のどこ
にか添はずはなれはてける

ふと來り又歸りゆく今の身になじめぬ
焚火焚いて淋しむ

さゝげ摘むわが生^をひたちし此家にはな
れし心淋しさにつむ

たま／＼に歸り來りてさ／＼げつみさ／＼
げ汁して食へど淋しき

母らしき心一つも持たぬ身の都を出で
／＼更に淋しき

吾子なりとこと／＼しくもかきいだき
故郷人によくぞまみえし

或る日或る時

物言はで十日すぎける此男女ふたりけものゝ
如く荒すまみはてける

そちらむき眠れる男其暗き寐ね姿まのあま
り痛ましきかな

もの言はぬ男の肉は石の如く心は負傷て
のけものゝ如く

うちたえて物を言はねば家のうち厩うまやの
如きこゝちするかな

もの言はぬ男女をとこをんながすすみはて暗く起居
る家のあはれさ

くしやくくと顔も手足も一様いちやうに投げや
りにする男おとこの荒みやう

蠅のうた暗く淋しくいづこにかひとけ
る如き淋しき家かな

争そひにあれはてし此暗き家に蠅は淋
しきうたをうたへる

もの言はぬ男の顔のすさみやう其瞳の
いろのさても荒みやう

わが瞳の光いかに淋しう荒れつらむか
くあはれめば涙泌みきぬ

物言はで君出てゆけば暗き家のわが身
一つに淋しさ寄せくる

相共にうらぎりそめしあはれなる肉に
冷たく泌みて雨ふる

あはれ吾子汝がとりすがる父母のちぎ
り沙にも似て悲しけれ

氣まづく家を出でたる人の顔家ぢうに
見ゆ家ぢう暗し

いさかひに家も淋しく身も淋しくこと
さら秋の悲しさ身に泌む

蒼白く瓦斯の光ぞしみ來るうらざりあ
へる暗き心に

心なほはなれんとして何物か笑ひ出す
を待てるが如し

三年のおしつけ細工ばら／＼にくすれ
ゆく見ゆ此おろかもの

さみだれの音の淋しさ二十四となりは
てし身のうすら冷たさ

此血の音此脈うてる我が命にひびいて
光れわれが言の葉

とざしれし重き心よ髪とけど髪さへ暗
く見えて悲しき

悲しさのはてかやあはれ其人に指さへ
ふれず別れし夏は

三重まはる帯の淋しさ恨めしさ青葉が
ほそる身に沁み渡る

心一つを通さんとするわが性にいつか
かへりて争そひにける

いつか又心一つが淋しさにかへりて蒼
く泣き沈むはや

さんくゝに責めさいなめる此心けもの
の如く迷ひ出でにける

みすゞかる信濃の國に人は住めど深雪
降りふる神代に似たる

入日入日まつ赤な入日何か言へ一言言
ひて落ちもゆけかし

投げ出せし此手にしるく全身の勞れ見
ゆなり暗く見ゆなり

瞳も唇も暗くにごりて全身の血は衰へ
にとぶくれにけり

熱^{あつ}よあがれかゝる淋^{しみ}しき全身^{ぜんしん}がうかさ
るゝまでうたうたふまで

潮^{しほ}の香^かのうらさびしくも一面^{いめん}にしみし
岸^{きし}邊^べを思^{おも}ひゆくかも

兒^こが語^{かた}る片語^{かたご}のふと浮^うぶ時^{とき}あそはるゝ
如^{ごと}く巷^{ちまた}をいそぐ

たはむれに泣^{なみ}をおきても別^{わか}るべき親^{おや}と
いふ名^なと吾^{われ}思^{おも}はなくに香^か子^こに

まことに、まことに、吾子をのこして出で
ゆかば或る日狂ひて狂ひ死ぬべし

石石石自ら燃ゆる時ありやものゝひと
きの泌む時ありや

人に逢ひて語る言葉も持たざれば家に
こもりて一人し思へる

わが行きて語る人なき淋しさに思ひ至
りし此夕べかも

ものゝ穂の遠く亂れてあきつとぶ野に
あか／＼と生命なげかゆ

きりぎりす戀さへ身さへ投げ出して何
として母となりはてし身ぞ

うつ／＼と暗き心をはこびゆく秋の林
の木々の冷たさ

此まゝに消ゆるが如く沈みはて死ぬか
もわが血淋しさおぼほゆ

静かさにかへりてものを思へかもいの
ち淋しくふきし芽のため

木の葉散る此新らしく芽ぐみたるいの
ちのはしにふれつゝぞ散る

秋の太陽ならの林の沈黙を赤く塗り塗
り悲しめるかも

しづかさに思ひ至りて薄青き水を戀し
み森にゆくかも

芽をふきし椰子の實を見るなつかしさ
わがいのちかくも生きてゆくらむ

しづかにも己が生命に思ひ入る其底深く
鳴けるこほろぎ

孤獨なる心がもらす一言の此しづけさ
にしくものぞなき

うす赤きたでの花つむは吾子なれや吾
がつみし日にもうす赤き花

此心秋の林はらをうつ／＼と暗く木の葉に
ふれつゝぞゆく

じり／＼と生命いのち燃ゆればわがほとり吾
子も吾夫あつもはにわの如し

母となりてはやも一ひと年嫁よめぎせしわが氣
まぐれの笑わらはれぬかな

人形もラツバもをどれよ鳴なれよおもち
や箱はこ笑ひ出せよ母ははとなりし氣まぐれ

くる髪かみをなで、育てむいとし子の母こて
ふわが身おそろしくなりぬ

妻つまといひ母ははと言ひて今日もくれはてぬ
もだせる心もだしてくれぬ

吾子わがこが言いふ其片言かたがはのきれくくにわがも
の言ことへば狼おおかみの如ごとし

つかれはて眠ねむらんとするわが血汐ちわれ
と守まもりて祈いのちれるいのち

故もなく汝を責むる時母の顔鬼にかも
似む悲しき母かな

一ふしの笛ふくすべさへ知らずして今
年の秋に向ふ悲しさ

秋の林高啼く鳥のなつかしく姿淋しく
見に入りにつけり

思ひ極りぬ此暗き顔ゴツ／＼と彫刻の
如くありわぶるかな

夫も子もそれよりもなほ此いのちいと
しと髪の一すぢも言ふ

わが信濃の雪のなかにとわきかへる湯
ぶね戀しも信濃に行かばや

みすゞかる信濃の國に人は住めど深雪
降りふる神代に似たる

入日入日まつ赤な入日何か言へ一言言
ひて落ちもゆけかし

あはれ入日つひに物言はずつひに言はず
只赤く赤く沈みゆきけり

まつ赤な入日今日もけふとてまつかな
入日入日はつひに物言はずけり

まざふくととがりし顔をとがらせて赤
き入日に見入るなりけり

たゞ一つ暗き心をうちまもり心のまゝ
の祈りに入らむ

或る日或る時此たくらみのはてもなき
心まくらく兒にすがりよる

いとしいとし吾が持つものゝ何一つほ
ろぶるなかれけがさるゝなかれ

此母の鋭き痛き神経に刺されて吾子の
つひに病むかや

ピク／＼と兒が全身の神経はふともふ
るえて母を憎める

つきはなされつきはなされて幼きもの
汝が神経のかくもあれしや

全神経の痛める吾子が顔をむけて母を
見るはや我を見るはや

夜もすがら兒は叫び泣くさんざんに母
が生命を喰ふと泣き泣く

偶然にたてし此家いつか又はたとたほ
るゝ時ある如し

妻と言はれ母と言はれて此家に起ち居
る吾れが姿^{すがた}悲^{かな}しき

愛せしと唯一言明し給へかし別れゆく
べき淋しき生^{いのち}命^{めい}に

大佛や観音や公孫樹^{こうそんじゆ}や鎌倉のさびしき
跡をながめこしかな

いつの間に衰^{おとろ}へたりし吾が肌の淋しさ
見せて海^{うみ}のかゞやく

斷崖たんがに寄せ打つ浪の淋しみしさをしみとく
見せて松まつ匂におふかな

人のにほひ其にほひこそ泌しみみにたれ海うみ
に向へどいらだちやまず

海見れど其一はしに觸れも得ず渚なぎさに立
ちて一人悲しむ

浪にかも又砂にかも此心今はまぎるゝ
すべもなきかも

一つかもめ渚にもだす一人の女のまみに映るわびしさ

自らの心かき裂き引きむしり狂へりし
闇に兒は這ひそめぬ

死にそこね又人間の一人となりて歩め
る此姿はも

おしろいのはげたる顔かほのみにくさのや
りどころなく海に向へり

我つひに母となりけり海て來てつくづ
く肌の衰へを知る

家をおき兒をおきて海を見に來たる淋
しき女をとがめ給ふな

なぎさなる砂ふめばまづ言ひしらぬ涙
流れぬ狭青の海よ

はしためのすゝり泣きのみきこゆなり
暮るれど淋し家に灯もなき

古里の葱のかをりよいつの間に彼の野
少女が母となりけむ

いつの世のいかなる道を行きもせば此
物思ひたえむとすらむ

暗く暗くなるにまかせて灯もつけず兒
と吾と悲しみに落ちてゆくかな

此母が怒りに寄らむすべをなみ座敷の
すみに玩具ならず兒

自らをいたはる外に何あらむ氣まぐれ
にのみ愛さるゝ兒よ

淋しくも吾が住む家に電燈の今日もと
もりつ又暮れてゆく

暗くらきに伏してうたへる

日向ひなたぼこ心淋しく大空にあがる繪え紙しを
見てありしかな

女主人をんなあるじの怒りし後の淋しさに吸はるゝ
如く泣ける婢をんなよ

かゝる日のなほつゞかば子よ母は淋し
さ故に死にはつるべし

紫の傘かさの匂ひにサラ／＼と降る夜の雪
も身もはかなけれ

猪熊しぐまなど時に峰よりあれ出で、深雪ふかゆきふ
るらし信濃の冬よ

痛し痛し疲れし惱の衰へに射し入るな
かれ冬の太陽

濁りたる此暗き腦何事も成るがまゝに
吾れをさいなめよかし

濁りはてなやめる腦の暗きかげ地に印
し出よ冬の太陽

世の中のあらゆるものは吾が爲にあら
ざるが故に面白からず

子よ呪へ母が心の底に沈める小さき
一粒の種

兒のにほひつくぐかげば兒も吾もけ
もの、如き心地こそすれ

われいつか氣^き狂^{くら}ひとなる日のあらむふ
と見し鏡見のがしがたし

ゆるし給へゆるし給へとうちむせぶ心
に泌みしこの薄笑ひ

しどけなく君がみ前にくづせれし口^{くち}紅^{べに}
濃き顔の涙にくみね

ぬぐえどもぬぐえどもなほ消えやらぬ
さびしきかぎり泌みし薄笑ひ

あはれ此妻がましろき頬を光り流るゝ
涙呪ひ給ひね

自棄^{じき}の涙頬を刺しつゝ流れゆく母の顔
見ね見て笑へ吾子

なげやりの生命のさきにうす青く芽の
ふきそめしいたましきかな

なんなんと君がところに快き言葉を出
す唇を嚙む

草の種子すこしちらばる八疊の日かげ
悲しも吾子の見えなく

つかれはてぬ今日は静かにあはれなる
吾子をばせめていたはりやらむ

三月の空を吹く風今日もかもあからさ
まなる心にひびき

おろそかにかくいたづらに過しゆく日
のうらざりの見えて悲しき

わらじ蟲何をひそかにひえくとわが
悲しみに這ひもよりしや

夕野原淋しくもだす一粒の心に影し落
ちゆく太陽

太陽よ汝れが言葉のしみくと生命に
聞ゆかくも親しく

太陽よ此天地あまのつちにたよたよと生きて淋し
き物語りせむ

うれひつゝ吾がゆく夕竹林たけのこ淋しく鳴れ
る道の悲しも

雨はれよ此おとろへし心をばかさ曇ら
せてあるにたへむや

夕の縁の白きえぶろん乳の香の泌みし
えぶろんかなしきえぶろん

兒のかけしえぶろんがはなつ乳の香の
わが肉にしみて痛き夕ぐれ

小さきえぶろん乳くさきえぶろん呪は
れて子を生みし吾母となりし吾

自らをあざけらむとて丸鬚をにくにく
しくも結ひにけるかも

夫よ許せかく愚なる自らをおほふすべ
なしつぐのふすべなし

片しきの袖の淋しさいつまでも此淋し
さのいやされずして

太陽よ一人の女永久とこしほに汝れにそむきて
死ぬと記憶せよ

はしきやし我が幼日こさなびの幼を知りし彼の
日の君の戀しさ

あざ笑ふ腦の淋しき暗がりに媚こぶるが
如く匂ふ丸まる鬚まげ

たゞれたる腦の冷つめたきくらがりにはひよつ
こり映うつる女髪結の顔

自みづからをあざけるとても何あらむ此おろ
かさをつぐのふすべなし

此この悔あはれを吾われ子こも其子そのこも一筋にとめてゆく
らんあはれさが見ゆ

あはれこのなまけ遊びにしみてゆく油
の如きいのち淋しき

時折に涙ぞたまる腫うの底のいのちにし
みて春は來にけり

やせほそり君戀しとて初あはせ給着てまゐり
なばゆるし給ふや

空にごりむし熱き風にじみ吹く此この憂鬱いううつ
にいのち死ぬべき

うちもだし今日も脈みやくうつ此いのち又此
ままにたそがれにけり

唯一つ生きのこりたる金魚をばあはれ
がりつつ麩を與へける

かくてなほ生てあるこそあはれなれ火
とり蟲にも劣れる生命

火とり蟲もろきみじかき美しきいのち
見るるこそ悲しかりけれ

日を一日もの言はぬ母のかたはらに眠
れる吾子の顔のあはれさ

此の記憶の淋しき影の一つだに太陽よ
汝に烙きつけて死なむ

いらく〜と今日も肉喰む神経にひびい
て冬の雨はふりつゝ

今日もわが又花札を切り暮し遊び暮し
つ暗きわが家に

ひゞわれし冬のみにくさ太陽よわが家
まともに照すことなかれ

何なれば吾が此家に泣きぬれてかく淋
しくも朽ちてゆくらむ

此夕暮一人歩める夫も子も何物もなき
道の淋しき

さんぐに風にもまれて散る青葉なま
なましくも瞳に見ゆるはや

わが生命青葉の如くいきくと暗き暴
風に吹きまくられむ

親子三人木の葉の如くさんぐくに吹き
とばされむず風の音聞ゆ

コトくくと兒がうちならす太鼓すは引
ちぎられて暴風こむぞも

チヨコくと秋の上野の公園の人にま
ぢりて吾子がゆくはや

夫よ兒よ吾等手を取りむつまじく上野
の秋をゆきにけらすや

獅子見ればここのな小さき國に住みて死
にもゆく身の淋しさおぼほゆ

あはれ兒よ母は此獅子の住む國に行き
たく思ひ立ちつくすなり

獅子の住む其國のはてに兒をつれて母
の心を知りにゆきたや

憎みいとしみ動物園を兒と歩めば此母
心けだものに似る

心刺すけものゝにほひ我を刺すあから
さまなるけものゝにほひ

太陽をしくくとあびて兒をつれて動
物園を歩みゆくかも

見かへれば太陽ひぞあざ笑ふ兒をつれて
動物園をすべなくぞゆく

動物園の水にも秋のしんくと迫るか
鷺の白くゆく見ゆ

愚にして大なるもの象よまた「べつかん
こ」して冬が来るぞよ

實^みの赤き美男かづらのひそかなる實の
赤さ冬の静けき赤さ

痛痕の秋

花咲かぬ朝顔の蔓いづくまでのびては
ゆくぞ淋しき家かな

吾子見れば吾が生みしてふうらやすの
心おごりのかぎり知られず

六^むとせ七^なとせ又夢の間に過ぎゆかん秋
風を聞^ききて涙を流す

夫^{つま}居らぬ此ひとつ家にやるせなの日の
あかくと射して悲しき・

秋の風かくも淋しく妻となり母となり
ゆく我なりしかな

淡路島彼の岩かげに泣きぬれて二人が
聞きし遠千鳥はも

ちりめんのなまめかしきがうら淋し母
となりける秋の虫干

身一つにあまねく秋の日をあびて座まれ
る我のかたちの淋しさ

子守うたついつまされて宵闇のうすら
明りに涙せしかな

海よ海よかかる淋しき命をば投げ入る
る日の見えて悲しき

夕ゆふされば旅なる夫つとを思ひわび淋しみしき家
の門をさまよふ

吾が夫の旅に出し日の夕ぐれの心細さ
よ石油つぐ音も

たよりなや神も吾わが夫つともありなしにかゝ
はりもなきさびしさ來る

水道橋よるの灯ひ見みれば去こ年ずの我が淋しみし
き姿目に見ゆるかな

ねざめけり宵よひに聞きたる雨の音のはら
はらとまだつゞきてあるかな

母と言ふ夢の名残にすがり鳴く此この晩ばん秋しゅう
の一つこほろぎ

ねざめけり唯蟲が鳴く眞ま夜よ中なかを一むら
すぎし風の淋しさ

思ひ出る淡路の海ははるぐと夢のや
うなり睡めに残る人

ほそくくと秋の日なかに匂ひ出づる濱
ちりめんの香も淋しけれ

二ツ三ツ秋の蟲とぶ日あたりにちりめ
んの衣ほせる静けさ

いつの日か白き濱邊にたどりゆき死を
思ひつゝたゞずむが見ゆ

橘姫君がとびけむ大渦の蒼の光の幸な
りしかな

かへり見れば悔より外に何物もなき女
なり海に捨てなむ

はらくと心時雨こころしぐれて一人寢の枕の灯を
ばかきおこす夜よ

泣寐せしあとの淋しさことことと玩具
しまへるひとり心よ

泣寐しぬかかゝる淋しき母の子は孤獨ひとりご
ころにひたとよりつゝ

淋しさに追はるる如く巷ゆく心一つに
子の添うて行く

のこし來し吾子を思へば我が心吸はる
るごとし巷をいそぐ

今よりはもだして人と争はじさびしい
かなや二十四となる

みづからのこの愚さをあはれみて寐し
子の頬に涙ながすも

人知れずかかる女が泣ける夜を伴にの
りて誰かすぎゆく

日比谷公園彼の秋を噴く噴水の音をし
みくと聞きに行きたや

品川の海に漂ふ秋の色見に来と胸に潮
くるごとし

にぎはしき夏の祭のよるのひのざんざ
めくより人戀ひそめぬ

やうやくに我がわがままのうらぎりの
身を喰らふころ秋の風は身に泌む

心沈みてはてもなき吾をうちめぐり兒
は淋しさにをどり狂へる

心今土つちにかも似て淋しかもすかるすべ
なみ兒もなげきわぶ

淋しさに兒は唯一人笛ならすももの言
はぬ母淋しと鳴らす

わが前に兒が並ならべたるおもちやにも吾
が暗きかげしみて見ゆかも

あはれ兒よ淋しき母に媚こびわたるなが
姿はも涙の如し

母の顔淋しくなれば家のうちおもちや
の如く捨てらるゝ兒よ

うす暗くさびしき土つちに芽をふきし草に
かも似む吾が家の兒は

叱ればひたと膝にすがりてうちわぶる
淋しきこびをいつか兒はする

泣くまねすれば悲しげに来て兒はすが
る兒にさへ甘え泣きまねをする

秋の雲少し流れてつともれし太陽の光
吾に物言ふ如し

物縫ふ心とならず幾日へし針みなさび
て秋に入りける

針箱はなつかしきもの秋くれば針の光
りの身をそゝるかも

指さきに細く冷く泌み渡る針ぞ戀しき
秋となりにけり

しらぐと女の肌をふるわしてこほろ
ぎ鳴けり秋の悲しさ

木の葉また黄となりつちに散りしかむ
せんすべもなやせんすべもなや

はら／＼と來ては時雨る、秋雨のなや
める髪にひゞきしむなる

病みほけて吾子がゆく道太陽よやくな
醫者のりゆく道やくなゆめ(此一首八日作)

かにかくに野に秋草の咲きいで、兒は
片言を言ひそめにけり

兒が語る片言こそは悲しけれ道ゆくな
べにおもはするかも

萩咲いてこほろぎ鳴いて秋くれど石か
も君が心悲しき

おしろいの匂ひ淋しや此秋の虫きゝす
まし湯あみせるかも

きりぎりすおしろいの香にしらくくと
ことしの秋の泌^しみ來るかも

兒を生みし女の肌のそことなき淋しさ
しのび鳴くかこほろぎ

まりざりす母となりてぞ一年ははやめ
ぐりきぬせんすべもなき

こほろぎは聲とぎすましとぎすまし秋
より秋と迫る淋しさ

彼の二年つひにしみぐ聞かざりしこ
ほろぎをきふと添寝する

木枯の吹きしく道を物思ひもの案じつ
ゝ歩める女

いたましき心のひゞに泌みてふく木枯
の音の淋し師走は

生れこし其あはれさがしみぐと身に
泌み來る木枯吹けば

思ひ寐の涙淋しき枕上ほそく射したる
灯もしめるかな

一すぢに泣かしめ給へ歌磨の女の如く
時雨降る夜は

身を責むる悔もなげきもなつかしや一
つ枕に時雨降る夜は

十年ぶり赤き毛糸を求め来て手袋あみ
ぬ吾が吾子のため

するくと赤き毛糸のからみたる指さ
きよいつか二十もすぎける

死は恐ろし命一つをもてあまし物恐れ
してよるひるとなき

今宵といふ今宵死になばいかにせむ心
おびえて限りしられず

我まゝは今憎み得ず此夜も彼の人思ひ
ひたに泣きける
(終り)

岩波花子の歌

雪消えのぬくき日なれば子等はみな青
き草つみ土手にあそべり

六月の風かほる家に花活けて歌も語り
ぬ若き日なりし

癡校^{ばい}をとりこわし居るくもり日を柳か
れ葉は音もなく散れり

憂鬱^{ゆううつ}は夕^{ゆふ}そぼふる雨にまたよわき心を
おそひ來しかな

美しき木曾の谷水夕日てる紅葉のなか
を瀛車は走れり

霧りはるゝ谷山の紅葉うすくこく、木曾
に入る瀛車さびれけるかな

秋霧りの冷き朝を息白く木曾の谷みち
息いしろくゆく

宮川の河原にさらす寒かん天てんに海の香りを
なつかしむかな

冬の草は小さき息いして雪の中に冷き風
にゆられてゐたり

さいかちの三ツ四ツ残る枯杖に川風寒
く粉雪降るなり

四十日ほそき息してひざの上にともち
しちごの命いのちかなしき(人の子の亡せしに)

家を捨て姉をのこして去りし子に都の
風は寒く吹くらむ

いかばかりもだえ苦しみ泣きつらむあ
ねにも言はず去りし妹よ

いとまごひする我を惜しみとめませし
は父が最後のみことばなりし

昔よびしふし其まゝに呼べど呼べど祖
母のみ墓は青くつめたし

みかんなる南の國を幼き日母にはなれ
て吾は來しかも

三ツなれば乳の甘きも忘れけりみかん
畑の記憶もあらず

新緑の香り涼しきまどに背と小包とけ
ばセルはかほれり

人の心と一日くにはなれゆく悲しき
子なり何にたよらむ

雪ふりの日毎につとくさびしさは心い
だいて泣かまほしけれ

幼子の寝顔がし見ればすさみたる心わす
れつ悲しき母かな

くもり日と枯村とのみはてしなき廣野
にたちて淋しさに泣なく

大正四年五月廿九日印刷
大正四年六月五日發行

定價金四拾錢 郵稅四錢

不許複製

著者 山田邦子
發行者 神田區三崎町三ノ一 寺田よし子

發行所

東京市麴町區有樂町
日比谷クラフ
婦人文藝社
電話本局五二五六
撥替東京三〇〇九五

印刷人 東京市京橋區山下町二番地 宮崎喜三郎
印刷所 東京市京橋區山下町二番地 喜文堂

電話新橋二二一八番

六
五
四
三
二
一

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
...

...

278
180

終

